ウクライナの戦禍に呼びおこされる生きかたと働きかた

私たちを開放してくれるもの

ロシアのウクライナ侵攻に胸を痛める毎日が続いています。幸いにも、私たちは命の危険と隣り合わせの日々を経験することなく生きてきました。しかしながらウクライナ侵攻は新たな悲劇の可能性を感じさせます。第二次世界大戦のアウシュヴィッツ収容所を経験したヴィクトール・フランクルは、著書『夜と霧』の中で人間とは何かを描き、私たちを救ってくれるいくつかの言葉を遺しています。

「その苦悩にふさわしく」

自分の人生を顧みたとき、苦しい出来事はなかったらよかったのか、例えば人との別れはなかったらよかったのか、出会わなければよかったのかと問われると、なかったことにできたらとは思わないはずです。どうしてでしょうか。悲嘆に暮れていたとき、人生の大切な何かにかかわっていたことを、心のどこかでわかっているからです。苦悩の中に内なる業績が存在することを証明しています。

「自分を超えていく」

仕事に手を抜かなければ疲れても爽やかさが残りますが、楽をしようとして手を抜くとかえってひどく疲れていやになってしまします。自意識が消えれば、言いかえると自分を忘れ、時間を忘れ、仕事に没頭すれば、ストレスもまた消えています。ふと、われに返ったときに自分の存在に気づきます。自分が勝手に引いていた限界の境界線を越えていた、人間は自分を超えていくものとわかります。

「内面化の傾向があること」

生きる支えは、不安定に変化する自分の外にはなく、揺るぎない自分の内にこそあります。周りに期待するのでなく、自分に期待されているものを生み出すために懸命になれば、周りには期待しませんから、もはや絶望もしなくなるかもしれません。こうした心境にかかわっているのは、繊細さであり身体の頑丈さではありません。本当に強い人は内面の繊細さを必ず持っているということができます。

「あれこれの態度をとることができる」

自由に決められない環境でも、自分の態度を決める自由は残されていて、私たちは無意識に自分の態度を選びとっています。生きていくことは選択の連続で、自分が選択していることを意識することによって自律の感覚は高められます。もちろん誤った選択をしてしまう危険には常にさらされています。私たちは、選択肢のない安全で豊かな世界で生きるより、選択肢のある危険な世界で生きることを望むようにできています。

「ユーモアは自己維持のため」

ユーモアは意外な視点から状況を客観的に描写してくれます。笑いは身動きの取れない状況から私たちをいくぶんでも解放してくれます。これが行われないと、私たちは絶望に陥り自殺ということにもなりかねません。逃避のためのトリックではありますが、自分から距離をとり、自分の未来を思い描くことで、現在の苦悩をあたかも過去の出来事のように見ることができるといわれています。

試されるのは逆境のときではない

フランクルは自分たちを人間として扱うことを貫いた強制収容所の所長のことを描いています。問われるのは、逆境のときではなく、恵まれているときに、どれだけ謙虚になれるかということだと思います。強制収容所とともに、人間であることを恥じずにいられないもう一つ出来事は南京事件です。日本の軍隊が罪のない市民に対して、約二十万人と推定される殺人を行いました。私たちは順境のときこそ、人間としての意志を政治に反映させることによって、悲劇への道を閉ざさなければなりません。

ヴィクトール・E・フランクル. 霜山徳爾訳. 夜と霧. みすず書房（1956）

（2022/04/14）